



この地図は、国土地理院の電子地形図 25000 をもとに作成した。

凡 例

- 会場予定地
- (仮称)舞洲駐車場予定地
- 市区界

【確認行動】

- 採餌
- その他行動(とまり等)
- 採餌
- その他行動(移動等)

環境類型区分

- 草地・緑地
- 裸地
- 水辺
- 市街地等

注：図中の数字は確認例数を示す。

1:25,000

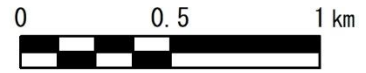


図 5.12.3 アオサギ確認位置

(f) 典型性・カモ類

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたカモ類の生態特性は表 5.12.19、現地調査における確認例数は表 5.12.20 に示すとおりである。

調査範囲において、カモ類は調査期間を通して確認された。確認例数は、カルガモの繁殖期の4月から7月に1,645例、非繁殖期に4,657例、計6,302例であった。採餌は多数確認され、カルガモの雛鳥が6月と7月に確認された。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5.12.19 埋立地の生態系におけるカモ類の生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	カモ類	生息基盤の利用状況	・主に冬季から春季に現地調査での出現頻度が高く、会場予定地及びその周辺の開放水面を主に越冬のための採餌・休息場として高頻度に利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・確認されたカモ類（カモ目カモ科）は冬鳥が多く、留鳥はカルガモ、旅鳥はシマアジであった。 ・主として淡水域で生息する小型から中型のカモや、比較的大型で潜水能力もあり海域にも生息するカモ類が確認された。食性は水生植物及び水生動物（昆虫類、甲殻類、軟体動物等）。
		繁殖	・冬鳥は大陸で繁殖する。留鳥のカルガモは、国内では全国で繁殖し、草むらや茂みの地上に巣を作り、一腹卵数7～9、抱卵期間は約26日。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・水生植物や水生昆虫類等を餌とする一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となる。当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「日本動物大百科 鳥類 I」（平凡社、平成8年）

表 5.12.20 現地調査におけるカモ類の確認例数

調査時期 項目	令和2年							令和 3年	合計
	非繁殖期	繁殖期					非繁殖期		
	2月	4月	5月	6月	7月	9月	1月		
総確認例数	3,297	920	461	151	113	262	1,098	6,302	
親鳥及び雛鳥の確認	-	-	-	7	4	-	-	11	
採餌	1,027	423	69	83	22	130	91	1,845	
その他行動 (移動等)	2,270	497	392	61	87	132	1,007	4,446	

- 注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。
 2. 親鳥及び雛鳥の確認、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。
 3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。
 4. 親鳥及び雛鳥の確認はいずれもカルガモである。

(g) 典型性・シギ、チドリ類

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたシギ・チドリ類の生態特性は表 5. 12. 21、現地調査における確認例数は表 5. 12. 22 に示すとおりである。

調査範囲において、シギ・チドリ類は調査期間を通して確認された。確認例数は、繁殖期である 4 月から 7 月に 826 例、非繁殖期に 187 例、計 1,013 例であった。採餌は多数確認され、コチドリが他個体を追い払う行動が確認された。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5. 12. 21 埋立地の生態系におけるシギ・チドリ類の生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	シギ・チドリ類	生息基盤の利用状況	・シギ類は、主に春季に確認例が多く、夢洲の水際部を餌場として利用していると考えられる。チドリ類は、主に夏季（7 月）に確認例が多く、夢洲の水際部を餌場として利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・確認されたシギ類（チドリ目シギ科、セイタカシギ科）は旅鳥が多く、冬鳥はヤマシギ、タンギ及びハマシギ、留鳥はイソシギであった。本邦では多くの種が春秋の渡りの時期に渡来する旅鳥であり、内湾や河口の干潟、沼沢地や湖沼の岸辺、水田などに生息する。昆虫類、貝類、ゴカイ類、甲殻類等を主に捕食する。 ・確認されたチドリ類（チドリ目チドリ科、イカルチドリ科）は旅鳥がムナグロ、ダイゼン及びメダイチドリ、留鳥がケリ及びシロチドリ、冬鳥がタゲリ、夏鳥がコチドリ、ツバメチドリは旅鳥一部夏鳥である。地面に浅いくぼみを作り、小石や枯れ草を敷いて巣を作る。河川敷、砂浜海岸、埋立地などで繁殖する。主に昆虫類、甲殻類、ゴカイ類等を餌とする。
		繁殖	・旅鳥のシギ類の多くは北極圏に近い高緯度地域の草地などで繁殖する。国内で繁殖するチドリ類は、地面に浅いくぼみを作り、小石や枯れ草を敷いて巣を作る。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・シギ類及びチドリ類は、夢洲の水際部で昆虫類、貝類、甲殻類、ゴカイ類等を捕食する一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となり、当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「日本動物大百科 鳥類 I」（平凡社、平成 8 年）

表 5. 12. 22 現地調査におけるシギ・チドリ類の確認例数

調査時期 項目	令和 2 年						令和 3 年	合計
	非繁殖期	繁殖期				非繁殖期		
	2 月	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	1 月	
総確認例数	13	344	246	24	212	137	37	1,013
他個体の 追い払い	-	1	4	2	-	-	-	7
採餌	7	235	199	8	201	107	33	790
その他行動 (移動等)	6	108	43	14	11	30	4	216

- 注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。
 2. 他個体の追い払い、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。
 3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。
 4. 他個体の追い払いはいずれもコチドリである。

(h) 典型性・コアジサシ

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたコアジサシの生態特性は表 5. 12. 23、現地調査における確認例数は表 5. 12. 24 に示すとおりである。

調査範囲において、コアジサシは繁殖期の 4 月から 6 月にかけて確認され、確認例数は 4 月に 74 例、5 月に 322 例、6 月に 139 例、計 535 例確認された。繁殖に係わる行動は、4 月に 2 例、5 月に 29 例、6 月に 24 例確認され、抱卵及び抱卵と思われる個体は 5 月から 6 月にのべ 23 例確認された。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5. 12. 23 埋立地の生態系におけるコアジサシの生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	コアジサシ	生息基盤の利用状況	・会場予定地及びその周辺の裸地で営巣し、周辺海域を餌場として利用している。
		一般習性・食性	・夏鳥として本州以南に渡来する。海岸、河口、河川、湖沼などに生息する。体長 10cm ぐらい以下の魚をとる。
		繁殖	・繁殖期は 5～7 月、一夫一妻で繁殖する。巣は、捕食者が近づきにくい小島や中州などの砂地に浅い窪みを掘ってつくる。1 巣卵数は 1～4 個で、3 個が多い。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・主に海域で小型魚類を餌とする一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となり、当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「原色日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉」（保育社、平成 15 年）

「山溪ハンディ図鑑 7 新版日本の野鳥」（山と溪谷社、平成 26 年）

表 5.12.24 現地調査におけるコアジサシの確認例数

調査時期 項目	令和2年							令和 3年	合計
	非繁殖期	繁殖期					非繁殖期		
	2月	4月	5月	6月	7月	9月	1月		
総確認例数	-	74	322	139	-	-	-	535	
鳴き交わし	-	-	10	5	-	-	-	15	
他個体の 追い払い	-	-	4	-	-	-	-	4	
餌運び	-	-	4	1	-	-	-	5	
求愛給餌	-	2	4	-	-	-	-	6	
交尾	-	-	2	-	-	-	-	2	
抱卵	-	-	5	18	-	-	-	23	
採餌	-	5	16	10	-	-	-	31	
その他行動 (移動等)	-	67	277	105	-	-	-	449	

- 注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。
 2. 鳴き交わし等の繁殖行動、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。
 3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。
 4. 抱卵には、卵自体を確認していないが、地上に座り抱卵と思われる姿勢をとっていた個体を含む。

(i) 典型性・ヒバリ

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたヒバリの生態特性は表 5.12.25、現地調査における確認例数は表 5.12.26 に示すとおりである。

調査範囲において、ヒバリは調査期間を通して確認された。確認例数は、繁殖期である4月から7月に145例、非繁殖期に140例、計285例確認された。囀りが多く確認され、そのほかに他個体を追い払う行動も確認された。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5.12.25 埋立地の生態系におけるヒバリの生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	ヒバリ	生息基盤の利用状況	・草地や裸地での出現頻度が高く、会場予定地及びその周辺を高頻度に利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・留鳥として北海道から九州に分布する。北海道では夏鳥。沖縄では数少ない旅鳥または冬鳥。草地、農耕地、河川敷、牧草地などに生息する。地上を交互歩行しながら餌をあさり、草の実や昆虫をついばむ。非繁殖期には河原の土手など、乾燥した場所で草の実を食べる。
		繁殖	・2月下旬ごろから徐々に繁殖地に渡来し、4月初旬から7月まで、年に1~3回、一夫一妻で繁殖する。巣は椀形の外径10cmぐらいで、よく草の根元につくる。1巣卵数は2~5個で、4個が最も多い。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・主に草の実や昆虫類を餌とする一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となり、当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」（保育社、平成15年）
「決定版 日本の野鳥650」（平凡社、平成26年）

表 5.12.26 現地調査におけるヒバリの確認例数

調査時期 項目	令和2年							令和 3年	合計
	非繁殖期	繁殖期					非繁殖期		
	2月	4月	5月	6月	7月	9月	1月		
総確認例数	57	37	57	34	17	6	77	285	
囀り	4	29	27	28	3	-	-	91	
他個体の 追い払い	-	-	7	2	-	-	-	9	
採餌	-	-	1	-	-	-	-	1	
その他行動 (移動等)	53	8	22	4	14	6	77	184	

- 注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。
2. 囀り、他個体の追い払い、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。
3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。

(j) 典型性・セッカ

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたセッカの生態特性は表 5.12.27、現地調査における確認例数は表 5.12.28 に示すとおりである。

調査範囲において、セッカは 1 月を除く各月で確認された。確認例数は、繁殖期の 4 月から 9 月に 151 例、非繁殖期に 2 例、計 153 例確認された。囀りが多く確認され、そのほかにも他個体を追い払う行動も確認された。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5.12.27 埋立地の生態系におけるセッカの生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	セッカ	生息基盤の利用状況	・草地付近での出現頻度が高く、会場予定地及びその周辺を高頻度利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・留鳥または漂鳥として本州以南に分布する。北方のものは冬に暖地へ移動する。平地の草原、河川、農耕地、牧草地など開けた環境に生息する。植物の茎を移動しながら、昆虫、クモ類を食べる。
		繁殖	・繁殖期は 4 月から 9 月中旬と長く、年に 2~3 回繁殖するが、番の関係が極めて希薄な一夫多妻である。イネ科植物の葉に巣を作る。1 巣卵数は 4~8 個である。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・主に昆虫類を餌とする一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となり、当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「原色日本野鳥生態図鑑〈陸鳥編〉」（保育社、平成 15 年）

「決定版 日本の野鳥 650」（平凡社、平成 26 年）

表 5.12.28 現地調査におけるセッカの確認例数

調査時期 項目	令和 2 年						令和 3 年	合計
	非繁殖期	繁殖期					非繁殖期	
	2 月	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	1 月	
総確認例数	2	18	45	44	28	16	-	153
囀り	-	17	40	43	20	-	-	120
他個体の 追い払い	-	-	4	-	-	-	-	4
餌運び	-	-	-	-	1	-	-	1
採餌	-	-	-	-	2	-	-	2
その他行動 (移動等)	2	1	1	1	5	16	-	26

注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。

2. 囀り、他個体の追い払い、餌運び、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。

3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。

(k) 典型性・オオヨシキリ

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたオオヨシキリの生態特性は表 5. 12. 29、現地調査における確認例数は表 5. 12. 30 に示すとおりである。

調査範囲において、オオヨシキリは 4 月から 9 月にかけて確認された。確認例数は、繁殖期の 5 月から 7 月に 8 例、非繁殖期に 2 例、計 10 例であった。囀りが 8 例確認されたが、採餌は確認されなかった。なお、確認位置は、重要種保護の観点から記載していない。

表 5. 12. 29 埋立地の生態系におけるオオヨシキリの生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	オオヨシキリ	生息基盤の利用状況	・会場予定地及びその周辺の草地を高頻度に利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・夏鳥として九州以北に渡来する。河口、河川、湖沼のヨシ原などに生息する。茎から茎へと移動しながら細く尖ったくちばしで昆虫を捕えるが、空中に飛び出して飛んでいる昆虫をフライングキャッチすることもある。
		繁殖	・繁殖期は 5～8 月、年に 1～2 回繁殖するが、本州中部以北では年に 1 回の繁殖がふつう。一夫多妻で繁殖する。ヨシの茎にイネ科の葉や茎を用いて碗形の巣をつくる。1 巣卵数は 4～6 個である。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・主に昆虫類を餌とする一方で肉食性の哺乳類や上位性鳥類の餌資源となり、当該地域の「埋立地の生態系」における生物間相互作用を代表する種であると考えられる。

出典：「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」（保育社、平成 15 年）

「決定版 日本の野鳥 650」（平凡社、平成 26 年）

表 5. 12. 30 現地調査におけるオオヨシキリの確認例数

調査時期 項目	令和 2 年						令和 3 年	合計
	非繁殖期		繁殖期			非繁殖期		
	2 月	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	1 月	
総確認例数	-	1	4	3	1	1	-	10
囀り	-	1	3	3	1	-	-	8
採餌	-	-	-	-	-	-	-	-
その他行動 (移動等)	-	-	1	-	-	1	-	2

注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。

2. 囀り、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。

3. 表中の「-」は、確認されなかったことを示す。

(1) 典型性・ハクセキレイ

地域を特徴づける生態系の典型性に選定されたハクセキレイの生態特性は表 5. 12. 31、現地調査における確認例数は表 5. 12. 32、確認位置は図 5. 12. 4(1)、(2)に示すとおりである。

調査範囲において、ハクセキレイは調査期間をとおして確認された。確認個体数は、繁殖期である 5～7 月に 47 例、非繁殖期に 136 例、計 183 例確認された。6 月に囀りが 2 例確認された。採餌行動は繁殖期に 13 例、非繁殖期に 63 例確認された。

表 5. 12. 31 埋立地の生態系におけるハクセキレイの生態特性

注目種区分	注目種	項目	内容
典型性	ハクセキレイ	生息基盤の利用状況	・ 夢洲の草地や裸地、水辺を中心に餌場として利用していると考えられる。
		一般習性・食性	・ 日本では留鳥あるいは漂鳥で、冬に多い。 ・ 低地の海岸地方、河川、湖沼等の水辺を中心に、その周辺の農耕地や市街地等にも生息する。 ・ 餌は主に昆虫食で、水辺を歩きながらついで採餌するほか、飛んでいる昆虫も空中で採餌する。 ・ 繁殖期以外は 1 羽で生活するが、餌の多い場所には何羽も集まることがある。
		繁殖	・ 繁殖期は 5～7 月、一夫一妻で繁殖する。 ・ 人工建造物の鉄骨の上や換気扇の中、軒下の窪み等に営巣する。 ・ 1 巣卵数は 4～5 個、雛は抱卵後 12～13 日くらいで羽化し、12～13 日くらいで巣立つ。 ・ 繁殖期と冬にはなわばり分散する。脅しのディスプレイは上を向いて尾羽をあげてさえずったり、ジャンプしたりするものである。
		食物連鎖上の関係及び共生の関係	・ 埋立地の生態系においては、草地や水辺周辺の昆虫類を餌資源としているほか、チョウゲンボウ等の猛禽類には捕食されて餌資源となり、低次～高次の食物連鎖において重要な役割を担うと考えられる。

出典：「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」（保育社、平成 15 年）
「山溪ハンディ図鑑 7 新版日本の野鳥」（山と溪谷社、平成 26 年）

表 5. 12. 32 現地調査におけるハクセキレイの確認例数

調査時期 項目	令和 2 年							令和 3 年	合計
	非繁殖期		繁殖期			非繁殖期			
	2 月	4 月	5 月	6 月	7 月	9 月	1 月		
総確認例数	31	20	22	15	10	50	35	183	
囀り	—	—	—	2	—	—	—	2	
採餌	19	5	8	3	2	21	18	76	
その他行動 (移動等)	12	15	14	10	8	29	17	105	

注：1. 確認例数は、ルートセンサス、定点調査及び任意調査の、のべ確認例数である。
2. 囀り、採餌、その他行動の確認例数は、月別確認例数の内数である。
3. 表中の「—」は、確認されなかったことを示す。